



病院管理者として病院図書室に期待すること

戸津崎 茂雄

I. はじめに

病院を取り巻く環境は最近特に加速度的に変化しており、それに伴って情報量も非常に増えている。移植医療から再生医療、遺伝子医療など進歩しつつある医学医療の情報、インフォームド・コンセントや EBM (証拠に基づく医療) などの医療の提供に関する情報、さらには高齢者社会を迎えて社会保障や医療保障をどうするのかという社会の動きに関する情報等々、病院を取り巻く情報は非常に幅広く量も多い。

また IT 革命の進行により情報の伝達手段も大きく様変わりしており、急速に普及しているインターネットによって誰でも手軽に情報の入手が可能になった。情報開示の進行もあって、誰でも公平に同じ情報が得られるようになってきている。

病院管理者は、経営的に厳しく効率性を求められる中で、社会的に存在価値のある病院として生き残っていくためには何をなすべきなのか日々悩んでおり、そのための情報の収集に努力している。

II. 病院管理者としての情報収集

病院の管理・運営に関する情報は飛躍的に増えており、いろいろな手段によって病院管理者は情報を得ている。

ニュース性のある情報は各種の新聞や雑誌で得ることができる。最近ではファックスを利用した即時性のある情報サービス (例えば「メディ

ファックス」) などもある。これらに加えて、たくさんのダイレクトメール、講演会や講習会の案内、行政からの各種の公報、医師会や病院団体からのお知らせや通知類も多い。さらにはメーカーから送られてくるおびただしい小冊子類。そのほか院内の動向を示す情報が各部署から連日送られてくる。外来患者数、入院と退院の患者一覧表、救急搬入患者一覧表、当直日誌等々。

数日の間病院を休んで出勤すると、机の上はこれらの書類が山積みであり、その整理にしばし時間をとられる。一読して廃棄する資料も多いが、保管すべき資料も多い。自分自身で保管しておくものの他、行政からの公報などは総務課や企画課など事務部門に回し、医局員に知らすべき資料は医局秘書に回している。さらに職員全体に知らせておくべき情報や患者さんに知らせるために院内に掲示しておくべき資料など、毎日自分なりに決めて処理している。

「社会保険旬報」と「日経ヘルスケア」は個人的に定期購読しており、下線をさかんに引きながら読んでいる。当院の図書室にある「病院 (医学書院) という雑誌も目を通すべき情報が多く、気をつけているが、毎号の目次のコピーを図書室より提供され非常に助かっている。

医師会や病院会などからの雑誌や冊子は直接手元に届くようになっているが、これらは複数部送られてくることが多く、一部は図書室に保管しておいて欲しい資料である。

「健康政策六法」や医師法・医療法に関する法律文章集はぜひ図書室に保管しておくべきであろう。法律ではどうなっているのかを調べた

いことがままある。そんなときに図書室が利用できればありがたい。

各種の統計類を確かめたいときもある。特に講演や勉強会などを頼まれた際、統計で確かめておきたいことも多い。そんなときに最近重宝しているのが、「国民衛生の動向」である。これには、人口静態や人口動態に関する統計、国民栄養調査など生活習慣病対策に関する資料や喫煙者率やアルコール消費量などの健康増進に関係した統計、さらには医師や看護婦などの医療関係者に関する資料や医療施設の状況の統計など、非常に幅広く統計や資料が網羅されておりぜひ図書室に常備しておいて欲しい一冊である。「厚生白書」は最近字も大きくなり、テーマを決めて編集されるようになっており、読み物としても読みやすく図書室には必要な本である。厚生省が厚生労働省となり、平成13年度版は「厚生労働白書」として9月頃に発行予定と聞いている。編集内容がどう変わるか、楽しみである。その他に、「高齢社会白書」、「医療経済白書」など少しずつ視点を変えての白書類も出版されている。白書類はあるときは真剣に、少し時間に余裕のあるときにはゆっくりとページをめくってみるのに楽しい本であり、予算の許す限り図書室に置いて欲しい本である。

Ⅲ. 病院図書室の役割

医学医療情報を収集し職員の求めに応じて提供することが病院図書室の基本的な役割である、ということに異論はなかろう。

しかし、インターネットの普及など情報の伝達手段が急速に様変わりしている状況を、病院図書室はどのように取り入れようとしているのか。インターネットの普及状況を見れば、職員が病院図書室を経由せずに各自で自分の望む文献を検索し手に入れることも可能になっている。インターネットのサイトを覗いてみると、文献検索、情報交換が日常化していることに気付く。そんな状況でも、なおかつ職員を引きつける魅力ある病院図書室であるためには何をな

すべきか。

職員が文献検索をするために図書室を訪れたときに検索の援助がしっかりとできること、そして文献複写の入手が時間を取らずに素早くできること、いわば病院図書室としての基本的なサービスがしっかりとできることが必要である。

それに加えて、職員にとって興味ある資料が用意されており気軽に利用できて、頭のリフレッシュが達成されるような図書室であって欲しいと思う。目的を持って図書室に来る職員にも、ふと足が向いて図書室に来る職員にも、敷居の低い優しい図書室であって欲しいと思う。そのための蔵書の工夫をぜひお願いしたい。

最近、いろいろな病院、あるいは学会でクリティカルパスや診療ガイドラインが作られている。これらの資料の収集はこれからの病院図書室にとって必要であろう。職員の要望は必ず増えてくる。一方では、ガイドラインのみで解決しない患者の診療にあたって役立つ資料も、病院図書室に必要になってくる。いわゆる“バリエーション”に関する資料、ガイドライン作成の基礎になったデータベース類、エビデンスのしっかりとした新知見に関する資料など、収集すべき資料は多い。クリティカルパスは看護婦を中心に医師や他のパラメディカルスタッフが参加して協同で作成されたり修正されたりするが、この作成・修正作業に病院図書室も参加して必要な資料を収集し提供すべきである。これからの医療は EBM やガイドラインの方向に行くことは確実と思われるので、その方面の資料の収集にはぜひ注目しておいて欲しい。

Ⅳ. 病院管理者として病院図書室に期待すること

患者さんに医療サービスを提供することが病院の役割である。図書室も、直接患者さんと接するところで患者サービスが提供できないか。そのことによって図書室も病院運営に寄与できないか。

最近、患者サービスの一環として図書貸出

サービスが広がっている。当院では職員の自発的な発想によって病院図書室での一般図書の蔵書が始まり、その後一般図書購入の予算もついて蔵書が増えた。常勤の司書によって本の整理ができていたこともあって、図書室に一般図書コーナーを設けて患者さんや地域に開放した。

病院の構造上の制約もあったが、患者さんに自分で自由に本を選んでもらいたいという考えで、ワゴンサービスではなくて図書室でのサービスとした。このことは、職員食堂や講堂などと共に“病院の地域への開放”の一環として、図書室の地域への開放につながった。さらに最近では、在宅療養部や訪問看護ステーションの看護婦さんを介して在宅で治療を続けている患者さんへの貸出サービスが行われたり、定期的な子ども図書室が院内の講堂で開催されたり、図書室の地域活動が広がっている。“地域に密着した病院、地域に開かれた病院”という当院の理念を具現化する重要な一部門としての役割を、図書室が担っていることになる^{1) 2)}。

今やインフォームド・コンセントに基づいた医療は当たり前のことになっている。医療者側から患者さんの理解できる方法で説明し、患者さんは十分に理解し納得したうえで治療を選択する、あるいは拒否をする。そのためには自分の病気に対しての正しい理解が必要であり、必要かつ十分な知識を得ることが必要である。

患者さんが病気についての知識を得る方法にはどんな方法があるか。医師等の医療者側からの説明による知識の取得、新聞やテレビ、あるいは雑誌などのマスメディアからの知識の取得、それに最近ではインターネットによる情報の収集などがあるが、これに病院図書室にある医学医療専門書からの知識の取得が加わっても良いのではないかと思う。インフォームド・コンセントを手助けする一つ的手段として、病院図書室にある医学医療専門書を開放する。もちろん病院図書室にある医学医療専門情報の開放に当たっては、エビデンスの十分でない情報などもあって、どの情報を患者さんに開放するの

かという問題や、情報を得た後の患者さんへのアフターケアの問題など考慮しておかなければならない事柄も多くある。まだまだ解決すべき課題は多いが、病院図書室にある医学医療専門情報を利用してインフォームド・コンセントの手助けをすることは、病院における治療チームの一員としての図書室の役割とも考えられる³⁾。

さらに、医学医療専門情報の地域への発信基地としての役割を病院図書室が担うことができないか、模索中である。

V. おわりに

これからは医療機関の機能分化が進んで、それぞれの医療機関は自分の病院の特徴と役割を明確にしなければならない。図書室の役割もその病院の役割によって異なってくる。自院の特徴を反映した個性のある図書室として変化していかなければならない。

医学医療専門情報を収集し職員に対して提供することで存在理由を得る病院図書室もあれば、患者サービスを取り入れて存在理由を得る病院図書室もあるだろう。自分の図書室の特徴を考慮した資料・情報の収集が必要であり、その上で、病院図書室間同士での情報交換、資料交換が必要になってくるのではないか。

病院図書室は「病院のシッポの先の先」だそうだが、じつと誰かがヒントをくれるのを待っていたら、切り落とされるのではないか。存在価値を示すためにシッポ自らが振れる必要がある。病院の将来計画に「こんなこともできる」と図書室も一役買うべきであろう。

参考文献

- 1) 山室真知子：患者さんと地域の人々への図書サービス。病院図書館。1993；13(1)：18-21.
- 2) 山室真知子：病院の地域医療活動と図書館サービス。病院。1997；56(7)：640-641.
- 3) 戸津崎茂雄：医学専門書の患者への開放。京都南病院医学雑誌。2000；18：23-28.